

2019年12月

瓢鮎抄（一三二） 尾池和夫

出立は桜紅葉の小径より
閉ざす門に鍔金具や秋の蝶
桂離宮鍔金具に秋日澄む
出勤の人迂回させ栗の毬
アジア象肩寄せあうて冬の暮
ラオスの市長再会冬日さす象と
冬の日や普賢菩薩の象に塵
冬蜂の巣らし阿吽の吽の鼻

台杉の枯れいろとして蔦一縷
茶畑の初雪の風横なぐり
宿り木に占領されし冬木かな
散紅葉浮く砥部焼の手水鉢
勾玉を磨く手元や冬うらら
冬の灯や上目つかひの翁面
知るひとのなくて銀座の年の暮
叡山電鉄一輛占めて年忘
氷室より今天上へ往かれしか
天頂やくれなる深き冬の星

2019年11月

瓢鮎抄（一三一） 尾池和夫

三番茶摘む手際よさ秋高し
秋祭まことに長き名の神も
新米の「おまぜ」いかがと山盛に
九十七歳皆地笠編む秋日射し
棚田なき国よりの客豊の秋
川に礼し鰻に礼し夕餉とす
藪枯かつては開拓村の畑
三国山嵐にゆらり柿すだれ
脱穀や稲架木つぎつぎ木にもどり
静まりて夜庭に低く二つの目
無花果の地味は畑の味として
幼子の肩に勲章ゐのこづち

高潮へ土囊積み増し鯉の湾
干拓の残せし池や雁渡る
秋風や龍宮窟の波静か
秋風や犬吠埼の無線塔
表参道こちら側なり酔芙蓉
土佐なれや魯は延び放題の餌

2019年10月

瓢鮎抄（一三〇） 尾池和夫

反射炉に桜紅葉の照り翳り
狩野川は北へ流るる芒原
硫化鉄の海岸のいろ秋夕日
馬面と呼ばるる岬翳雲
この山より硝子産み出す初紅葉
風蝕の崖の上なる翳雲
伊豆石の塀をはみ出し烏瓜
秋雨や六方石の石畳

烏帽子山は浅間神社秋祭
湯筒なる源泉に茹で秋野菜
ぎやうさんの餅まいて秋祭果つ
三島熔岩流のしはしは小鳥来る
伊豆に多き三島神社や银杏の実
海中のポットホールや秋日和
火砕流跡の地層や秋夕日
この山にマンガン鉱脈初紅葉
秋の山一気に昇るループ橋
伊豆半島は西へ傾き秋夕焼

2019年9月

瓢鮎抄（一二九） 尾池和夫

勝山・永平寺吟行一八句

車窓よりはるか湖北の夏の霧
比良山の崩れの目立つ青嵐
越前と付く駅ばかり青田風
近づけば姿を見せず夏の山
福井竜の出迎のあり夏霞

行く先の「恐竜注意」青葉風
白亜紀の地層わが世の夏の蝶
恐竜は竜にあらざり梅雨茸

梅雨空より白山あたり遙拝す
勝山や織機の音も五月晴
青しぐれ集落ごとの流山
山滴る八岐大蛇の川へ風
下位段丘より川底へ鮎を釣る
火事花とおそれこの地のたにうつぎ
麦茶用六条麦や麦の秋
七堂伽藍隠してしまへ虎が雨
梵鐘の低きうねりや梅雨曇
梅雨晴の屋敷や笏谷石の橋

2019年8月

瓢鮎抄（一二八） 尾池和夫

刈りてすぐ火を放たれし麦畑
足し植ゑの夫は西日に顔を上げ
植田なり卵は森青蛙なり
震災の報告にしてさくらんぼ
津波到達地点ここまで朴の花
海霧ふたたび浄土ヶ浜に松の列
海霧去りて沖へ舳先を立てにけり
夏霧や余震に目覚め海を見る

あくまでも鹿は野生ぞ袋角
学んだり教えられたりして芒種
ユクノキの梅雨に樹冠のととのひぬ
品川や風人工の梅雨晴間
湧窟の竜の口より梅雨出水
老鷲や七堂伽藍跡の苔
棚田まで郵便配達揚羽蝶
歪とは言はず和蘭陀獅子頭
蚊を打ちてより耳澄まし目を凝らし
京野菜抱へ夏越の大祓

2019年7月

瓢鮎抄（一二七） 尾池和夫

伊豆大島一八句

項垂るるてるてる坊主春驟雨
とは言へど活火山なり春の島
御神火の島に欠かせぬ藪椿
掛巻くも綾に椿は実を残す
真水なき島や椿に雨荒き
火山島の水瓶満たせ春の雨
椿落つ昼なほ湿る木の根道
かつて火口いま新緑の波浮港

夕陽現れ虹を二重に三原山
スコリアと樹海をつなぎ春の虹
一夜経し伊豆大島は薄暑なり
東墓の卵なぜ徑に
熔岩や飛べぬ斑猫地に落ちて
御神火とふ噴火幾たび草若葉
新緑の樹海は海へ傾れ込む
鶯や割目噴火の跡に木々
天草干す熔岩流の坂に干す
飛魚や島を離るるジェット船

2019年6月

瓢鮎抄（一二六） 尾池和夫

心臓の騒ぎ激しき涅槃西風
春暁や最高血圧正常に
病窓に離合集散春の雲
行春の雲に大陸移動説
確定申告落ちつきし夜の病室に
花曇り日にち薬を効能に
ブラックホール姿見せたる花見どき
星ひとつほしひとついふ子ばら芽吹く

フィールズ賞の窓や源平しだれ桃
冷たさのほどよき春の小川かな
海食崖の穴の大小暮れかぬる
春驟雨さなか防災学講義

三上山見通す路やけふ穀雨
分蜂の行方さだめて蜂の消ゆ
学名に「雑草」は無し昭和の日
木苺の花を印に地図の道
苺ひとつショートケーキは昔風
老鶯よわが心臓もよどみなく

2019年5月

瓢鮎抄（一二五） 尾池和夫

残雪や酒の字現るる角館
猿山は熔岩ドーム春の風
引汐の磯風強しひじき刈る
うららかや出世稲荷は正一位
降る気なささうに飛び去る春の雲
もどかしき頻脈の目の涅槃西風
病室に春の休暇を賜りぬ
上半身電極だらけ春の雲

マンデリンビターブラック春愁
春まけて芝生養生中につき
ものの芽や風の強まる午後三時
落城の道はこの道麦の秋
標準木その隣なる初桜
着任の挨拶のあり花見客
花冷や夜更の酒座の絵空事
出番待つピエロに花の吹雪けり
ここからがマグマの痕ぞ花の塵
乃木坂の乃木家の墓所や桜薬

2019年4月

瓢鮎抄（一二四） 尾池和夫

中之島の薔薇園の冬愛想なし
アネモネや異国の遺る港町
アネモネや宝飾店の黒真珠
主治医確認春節朝の不整脈
深呼吸より全身麻酔春の朝

腹腔鏡手術より覚め春の昼
息切れの上野の森や猫の恋
卒業の祝ひに足りず花の種

内裏雛一部始終を眼差しに
言ひ換への格言あそび春暖炉
麦青む畝の直線つまびらか
押し分けて咲くこのあたり春竜胆
うららかや出世稲荷は正一位
パステルに春の匂ひや二年坂
吉野川登る朝日と春の潮
火焰茸注意の山や春闌くる
今はまだ耕しの地ぞ避難場所
日光の滝壺に置く春の虹

2019年3月

瓢鮎抄（一二三） 尾池和夫

北国の夜を深くして鱈の鍋
北海道のへそとふ雪の下のこと
外に出でてけふ大寒と声に出て
塔芯の礎石の穴や雪の果
駅ごとに残雪増ゆる登り坂
目礼や祇園の路地の春めきぬ
黒松の菰切り落とし春の雷
梅が香や活断層の上盤に

唐突にやや早口の初音かな
鶯のこゑに始動す午前五時
水温むゴリラの鼻のやすけさよ
風あれば風のかたちに春の砂
霞濃し鬼ヶ島への潮の道
この列車途中打切り春颯
延着の旅の宿借る蜷汁
白魚の目玉数ふる笹の上
がき大将子分残して卒業す
いつまでも母校は母港紅枝垂

2019年2月

瓢鮎抄（一二二） 尾池和夫

初雪や三角末端面著き
大雪の候と諾ふ帰り道
大雪となればさすがの関ヶ原
山河襟帯朱鷺色に明け冬の月
初夢の不満をいうて二度寝せる
熔岩に見立てし菓子の淑気かな
お寒おすと福笹越しの声を受け
四条にて日付の変はる残り福

一茶忌の日だまりを蠅動かざる
旅にても余震情報仏の座
我がための祈りにあらず寒詣
病院へ一番乗りの落葉踏む
土鍋より湯気のますぐや小正月
土佐湾へ沈む下弦の冬の月
雪景色真白と言へぬ土佐国
谷ごとに雲のかけらや冬の朝
土讃線隧道百余冬景色
巨大クレーン雲吊り上げて冬の月

2019年1月

瓢鮎抄（一二一） 尾池和夫

新藁を吹き飛ばしをり象の鼻
とりあへず桜紅葉の祇園まで
霜始降の候とて着重ねて
初霜を歩く先々消えゆけり
雄雌の数釣り合はずをり鴨の群
熔岩トンネル崩落の池凍りけり
角と角ぶつける牛に隠岐の冬
勝鬨橋は吾と同年年惜しむ
信貴山、法輪寺
水くくるとはと紅葉の品定め
縁起絵巻一卷よりの冬の旅
第二巻絵巻の童子冬もみぢ
転読の僧の美声と十二月

全経典あつといふ間ぞ冬の寺
紅葉且つ散るや人の世かくのごと
寅の日の虎の尾太し落葉道
信貴山や紅葉散り込む虎の口
法の字の三寺の塔と里の冬
堂冴ゆる飛鳥由来の鷗尾瓦